

2023 年 4 月 30 日（日）「イゼベルの放任 ～テアテラ教会の実践と妥協～」

ヨハネの黙示録 2:18-29

18 ティアティラにある教会の天使に、こう書き送れ。『燃え上がる炎のような目と、燃えている炉から注ぎ出される青銅のような足を持つ神の子が、こう言われる。 19 「私は、あなたの行いと愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている。また、あなたの近頃の行いが以前の行いにまさっていることも知っている。

20 しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは、あのイゼベルと言う女をなすがままにさせている。この女は、自ら預言者と称して、私の僕たちを教え、また惑わして、淫らなことを行わせ、偶像に献げた肉を食べさせている。 21 私は悔い改める時を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしな。 22 見よ、私は彼女を病の床に伏させよう。彼女と共に姦淫を行っている者たちも、その行いを悔い改めないなら、大きな苦難に遭わせよう。 23 また、この女の子どもたちも打ち殺そう。こうして、すべての教会は、私が人の思いや心を見通す者であることを悟るようになる。私は、あなたがたの行いに応じて一人一人に報いよう。

24 しかし、ティアティラの人たちの中で、この女の教えを受け入れず、サタンのいわゆる深みを知らないあなたがたに言う。私は、あなたがたにほかの重荷を負わせない。 25 ただ、私が来るときまで、今持っているものを固く守りなさい。 26 勝利を得る者、私の業を最後まで守り続ける者には、諸国の民の上に立つ権威を授けよう。 27 彼は土の器を打ち砕くように、鉄の杖をもって彼らを治める。 28 それは、私が父からそうした権威を授けられているのと同様である。また、勝利を得る者に明けの明星を与えよう。 29 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。』

【序論】

黙示録 2～3 章に登場する七つの教会を一つずつ見えています。ほとんどの教会に何らかの誉められる点と責められる点があるようで、これは現代の教会にも言えることでありますが、長所と短所のいずれかに傾いてしまうこともあれば、両方が同時に現れることもある。良い目的で始められた働きが、かえって問題の種となってしまうこともあります。ここで叱責しか受けていないような教会であっても、その教会に長所がないというわけではありません。反対に、ここでは称賛しか語られていない教会もありますが、その教会にも何らかの弱さや誘惑はあったはずです。メンバーが変わることや周辺社会の状況の変化によって、問題が引き出されることもあるでしょう。

今日はテアテラ教会へのメッセージから学んでまいりますが、この教会は先に見たエペソ教会と反対の意味でバランス感覚が損なわれていたようです。エペソ教会は、異端を見分ける鋭い目はあったけれど、愛に欠けるようになってしまった。それに対し、テアテラ教会は、愛と奉仕においては成長していたけれど、異端を放置するという問題を抱えていたようです。許容範囲の広がりか、かえって仇となってしまう可能性があります。

【本論】

本論 1. テアテラという町

まず、テアテラという町について調べてみましょう。テアテラはペルガモの南東約 60km に位置し、現代におけるアクヒサルに該当します。紀元前 280 年頃のギリシャ時代、セレウコス 1 世によって軍事的拠点として建てられた町ですが、一時的に領有権がペルガモ王国に移行し、更に紀元前 190 年頃にはローマ軍によって占領されました。工業と商業によって繁栄し（羊毛、リンネル、染物、皮細工、陶器製造、青銅細工など）、その中でも特に、巻貝の貝殻を原料とした紫色の染料は有名でした。新約聖書の中には紫布商人のルデヤ（リディア）という女性が登場しますが、彼女はパウロの伝道によってイエス・キリストを信じるに至った人で、染物事業に成功した婦人であったと思われます。彼女の家族がテアテラ教会の中核となっていたことが想像できるでしょう。



ティアティア市出身の紫布を扱う商人で、神を崇めるリディアと言う女も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話に注意深く聞いた。そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、その時、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言って、無理やり招き入れた。（使徒 16:14-15）

テアテラは、宗教的には太陽神テュリムノスが町の守り神として崇められ、エペソと同様にアルテミスの女神のための神殿もありましたが、皇帝礼拝はさほど流行っていなかったようです。セレウコス 1 世は親ユダヤ的な政策を採っていたので、彼の時代には多くのユダヤ人がこの地に入植し、新約聖書の時代にも大きなユダヤ会堂がありました。

今日はテアテラ教会に対する主イエスからのメッセージを「称赞」「叱責」「約束」という三つのポイントで見えてまいります。

本論 2. 称赞（行い、愛、信仰、奉仕、忍耐）

ティアティアにある教会の天使に、こう書き送れ。『燃え上がる炎のような目と、燃えている炉から注ぎ出される青銅のような足を持つ神の子が、こう言われる。「私は、あなたの行いと愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている。また、あなたの近頃の行いが以前の行いにまさっていることも知っている。（2:18-19）

「燃え上がる炎のような目」という表現は既に出てきましたが（1:14）、これは完全なる正義をもって万事を見通す主イエスの目、「燃えている炉から注ぎ出される青銅のような足」とは、万物の支配者であるイエスの権威を表します。黙示録において「神の子」という表現が出てくるのは珍しく、ここにしか見られません。この世界の究極的な支配者が主イエスであることが強調されています。

テアテラ教会の優れた点が称賛されていますが、この教会は「行いと愛と信仰と奉仕と忍耐」とにおいて評価を受けています。これらのことばを総括してみると、信仰の実践において豊かな実りが見られたということでしょう。「行いと愛」という部分は、エペソ教会の課題であったことを思い起こします（2:4）。この教会の信徒たちは、もてなしや支援、外部からの圧迫にも屈服しなかったことにおいて、忠実な歩みを続けてきたようです。「近頃の行いが以前の行いにまさっている」ともあるように、信仰を持ち始めた頃にも増して「行い」において成長していた。実行力があつた。ことばだけではなく、実践が伴っていたのです。

本論 3. 叱責（イゼベル、従者、子ども）

しかしながら、この教会にはその反面において、異端を野放しにしているという問題がありました。

しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは、あのイゼベルと言う女をなすがままにさせている。この女は、自ら預言者と称して、私の僕たちを教え、また惑わして、淫らなことを行わせ、偶像に献げた肉を食べさせている。（2:20）

この当時教会内で流行していた異端が様々な名称で登場しますが、ここでは「イゼベル」です。旧約聖書では列王記に出てくるイスラエルの王妃で、彼女は元々フェニキア人でありましたが、イスラエルの王アハブに嫁ぎました。この政略結婚によってイスラエルにバアル宗教が蔓延し、王自らバアルに仕えるという背信行為に及びます。

- ・ アハブにとって、ネバトの子ヤロブアムと同じ罪を犯すのはささいなことだったため、シドン人の王エトバアルの娘イゼベルをめとり、進んでバアルに仕え、これにひれ伏した。（Ⅰ列王 16:31）
- ・ ヨラムはイエフを見ると、「どうしたのか、イエフ」と尋ねたが、彼は、「何がどうしたのかだ。あなたの母親イゼベルの淫行と呪術がはびこっているというのに」と答えた。（Ⅱ列王 9:22）

イスラエルにおいてこれほど悪い時代はかつて存在しなかった。黙示録に出てくる「イゼベル」とは、偶像礼拝と不品行の象徴であり、その異端を擬人化した表現です。実際にそのような名前の女性がいたということではないと思われますが、男性であれ女性であれ、その教えを広めている人がいたということでしょう。「自らを預言者と称し」と言われているくらいですから、テアテラの教会で何らか指導的な立場を得て信徒を混乱させていたのです。異端を見分ける目が具わっていない人々は、騙されて着いて行ってしまった。具体的には、「惑わして、淫らなことを行わせ、偶像に献げた肉を食べさせている」と言われているように、霊的姦淫（つまり偶像礼拝）へと信徒を誘っていたのでしょう。偶像に献げた肉を食べること

は、使徒 15 章におけるエルサレム会議において、初代教会が「避けるべきもの」として決定した事項でした。

「惑わし」という事柄において、現代的な問題にふれておきたいところですが、危険な内容なので説教原稿の中だけに留めさせていただきます¹。

私は悔い改める時を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしな。見よ、私は彼女を病の床に伏させよう。彼女と共に姦淫を行っている者たちも、その行いを悔い改めないなら、大きな苦難に遭わせよう。また、この女の子どもたちも打ち殺そう。こうして、すべての教会は、私が人の思いや心を見通す者であることを悟るようになる。私は、あなたがたの行いに応じて一人一人に報いよう。(2:21-23)

この「イゼベル」と呼ばれる異端のインフルエンサーは、幾度となく警告を受けていたようです。悔い改めの機会が与えられていましたが、ついに時が満ち、裁きが宣告された。「病の床」が意味するところが何であるか、重病か死かは分かりませんが、主ご自身が動かれるということです。

¹ もう亡くなった方ですが、フィンランド人の牧師ヨハネ・ユリンさんという方は、フリーメイソンの 33 位階（最高位）まで上り詰めた人でした。1991 年にフィンランドのフリーメイソンに入会し、16 年間所属していました。彼の息子さん夫婦が主イエスを信じたのをきっかけに、彼自身も救われました。フィンランドの TV7 で、彼は次のように証言しています。

- ・「救いを受けてから、フリーメイソンに属する 8000 人のフィンランド人の中から少しでも多くの魂を救うために働いている。フリーメイソンのロッジで、彼らが本当に崇拝している人が何なのかを理解させようとした。」
- ・「位階が上がっていく毎にフリーメイソンの秘密が明かされるため、自分の位階とその下の位階のことは知ることができない。位階が上がる度に誓いをするが、何に誓っているか分からずに誓っていた。」
- ・「儀式の中で『神』という言葉や『聖書』が引用されていることで、慣習的なクリスチャン、つまり自分の生まれ育ったキリスト教文化や宗教的伝統に従って、自分がクリスチャンであると考えている人は、フリーメイソンの儀式が聖書に基づいたものだと思いがちで勘違いしてしまう。」
- ・「残念なことに多くのフリーメイソンは、自分たちがキリスト教の神に仕えていると誤認している。これはロッジに司祭と司教がいるためだ。ウェーデン国教会において半数の牧師がフリーメイソンだ。」

[Interview With a Former Finnish 33rd Degree Freemason part 1](#)

[Interview With a Former Finnish 33rd Degree Freemason part 2](#)

ユリン氏は、33位階に到達したとき、フリーメイソンの中で「神」と呼ばれていた存在がルシファー、つまり悪魔であったことを知りました。彼はフリーメイソンを脱退し、イエス・キリストの伝道という真逆の道を歩み始めましたが、フィンランドのTV7でこのインタビューが収録された2011年6月6日から17日後の6月23日に、謎のバイク事故で亡くなりました。フリーメイソンには、内部告発者には必ず死をもって報いるという取り決めがあるそうです。

「彼女と共に姦淫を行っている者たち」とは、元々正統的な信仰を持っていたのに異端に着いて行った者たち。「この女の子どもたち」とは、最初から異端を信じて入ってきた者たちを指すでしょう。「イゼベル」自身にはもはや悔い改めの機会は残されていませんが、追隨していた者たちには（使われている動詞が未来形であることから）まだチャンスが残されていたことが窺われます。問題を引き起こす者への裁きが人一倍重いということが分かるでしょう。

「こうして、すべての教会は、私が人の思いや心を見通す者であることを悟るようになる」という表現は、極めて旧約的です。特に出エジプト記やエゼキエル書に頻出する「主であることを知る」という表現の踏襲であり、主がご自身のからだなる教会を聖く保つために、時に容赦ない執刀をなさること、それを見る者が主を恐れるようになることが強調されています。

本論 4. 約束（終末的逆転）

24 節以下では、異端になびかなかった者たちへの約束のことばが語られていきます。

しかし、ティアティラの人たちの中で、この女の教えを受け入れず、サタンのいわゆる深みを知らないあなたがたに言う。私は、あなたがたにほかの重荷を負わせない。(2:24)

この時代に蔓延していた異端である「グノーシス主義」では、サタンを打ち破るためには人はサタンの牙城に入り込んで「悪の深み」を経験してみなくてはならない、と教えられていたようです。この思想の危険性は言うまでもないでしょう。危険薬物の危険性を理解するためには敢えてそれを投与してみなくてはならないと言われているようなものです。薬物そのものに体が毒されてしまうかもしれません。異端の欺きの言葉に騙されなかった人々には「ほかの重荷を負わせない」と言われています。分かりにくい表現ですが、「主がそのような誘惑に信徒を陥れることはない」ということでしょう。

ただ、私が来るときまで、今持っているものを固く守りなさい。(2:25)

「今持っているもの」すなわち「最初に教わった福音」を決して手放してはいけない。最後まで福音に立ち続ける人は「勝利者」と呼ばれます。

勝利を得る者、私の業を最後まで守り続ける者には、諸国の民の上に立つ権威を授けよう。

彼は土の器を打ち砕くように、鉄の杖をもって彼らを治める。それは、私が父からそうした権威を授けられているのと同様である。また、勝利を得る者に明けの明星を与えよう。

(2:26-28)

「勝利者」に与えられている二つの約束：

① 諸国の上に立つ権威

現在の世において、私たちは大きな力を持っているわけではありません。ここでの約束は、現在における富の繁栄や武力的な能力のことが言われているのではないことは一目瞭然です。これは、世の終わりに起きる逆転劇、平和を貫かれた王イエスに従う者にしか与えられない「永遠の神の国」の統治を指すのです。

② 明けの明星

一般的には「金星」を表すことばで、夜明けを暗示していることが多い。主イエスの再臨によって新しい世界が明け染めることがイメージされます。新天新地が到来し、その永遠の王国を主イエスと共に治める特権が語られていると思われます。

【結論】

今日は、テアテラ教会へのメッセージから学びました。この教会は、実践においては豊かな成長を遂げていたのに、異端を野放しにするという問題を抱えていました。隣人に対する優しさが、間違った教えまで許容するという妥協を引き起こしていたのです。エペソ教会は異端を見抜くことにおいては鋭い目を持っていましたが、愛が欠落するという真逆の問題を抱えていました。バランス感覚に欠けた教会が少なくなかったのです。テアテラ教会へのメッセージから読者が受ける勧告は、「教会は適切に戒規を執行することを恐れるな」ということでしょう。福音に混ぜ物をする人が現れたとき、それを放置してはいけません。それを許容し続けることと「優しさ」とは違います。エペソ教会の厳しさとテアテラ教会の愛のわざは共存可能であり、両方の良いところに磨きをかけていくことができるのです。純度の高い福音に立ち、それに基づく愛のわざを行なうことが私たちの目標ではないでしょうか。

【祈り】

真理に立つことと愛を行なうことの両方を求め給う、天の父なる神様。信仰の道は狭く、バランス感覚が崩れるといずれかの崖から転落する危険性があります。しかし、バランス良く良い面が伸ばされていくと、かつて見えなかった景色が見えてくるのかもしれません。私たちが今見ているところとはどこでしょうか。未だ完成に至っていない私たちを導き、あらゆる面で純粋さを増し加えていく信仰生活を営むことができるよう、御霊によってお助けください。主イエスに喜ばれる教会であることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、ご自身を愛することを求め給う、
父なる神の愛、
真理の御言葉に立たせ、どこまでも純粋な福音を求めさせ給う、主イエス・キリストの恵み、
信仰のゴールである愛のわざへと常に導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。